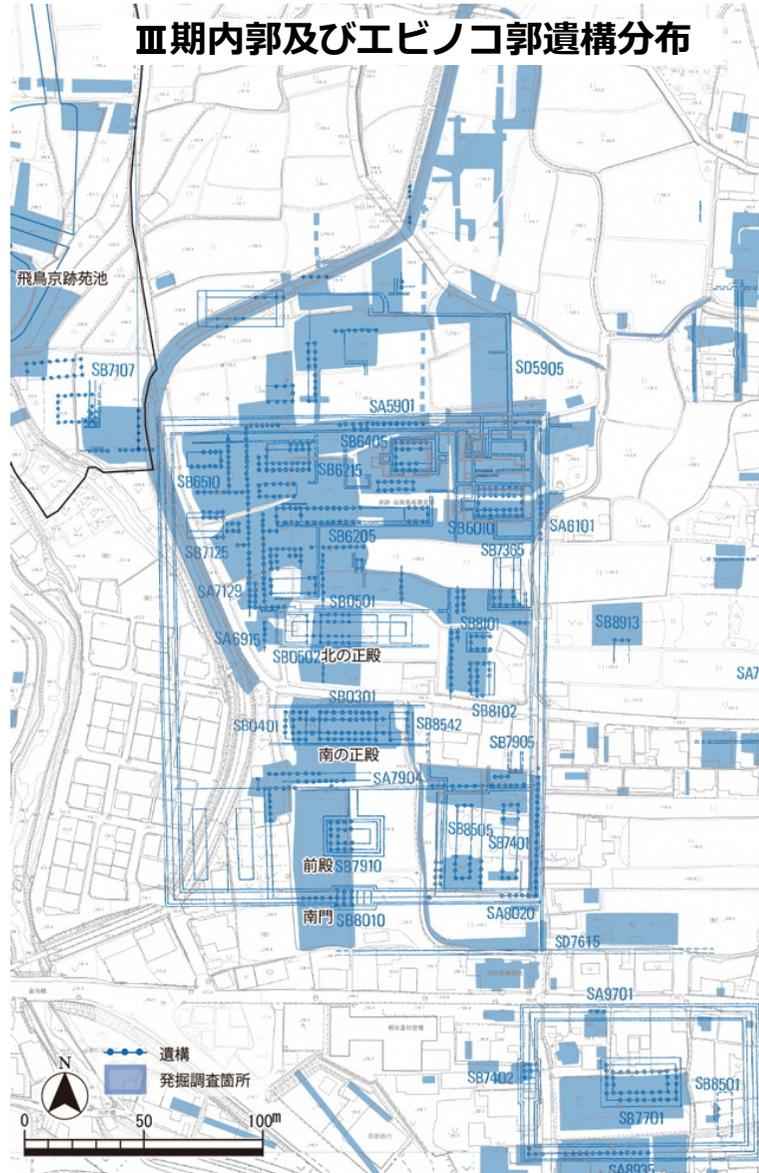


## 7 飛鳥宮跡 発掘調査の概要

### 飛鳥宮跡の発掘調査の概要について整理



出典：飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書（H26.3 明日香村）

### ■主な発掘調査の概要■

1959	東西方向一本柱列（北一本柱列）、溝三条などを検出。重要遺構のあることが判明	奈文研
1960	内郭北東部から方形区画敷石（第4次で井戸跡と判明）を検出	檀考研
1961	内郭の東面掘立柱（東一本柱列）を確認	檀考研
1962	下層のⅡ期宮殿遺構を検出	檀考研
1967	下層のⅠ期宮殿遺構を検出。飛鳥宮跡において初めて木簡が出土	檀考研
1975	南北の掘立柱塀及び石組溝を検出。外郭を画する施設の確認	檀考研
1976	Ⅲ期外郭遺構の下層から「白髪部五十戸」「大花下」「小乙下階」等木簡が出土	檀考研
1977	エビノコ大殿（東西9間、南北5間）の検出	檀考研
1979	内郭南区画で大型掘立柱建物（前殿、東西7間、南北4間）の検出	檀考研
1980	内郭の南門を確認し、内郭の形状と規模を確定	檀考研
1985	Ⅲ期外郭東面掘立柱塀に接して「辛巳年」、「大津皇」、「太来」、「大友」などの木簡が出土	檀考研
1989	エビノコ大殿の南面掘立柱塀の検出	檀考研
1990	エビノコ大殿の南方でⅠ期とⅡ期の掘立柱建物を確認	檀考研
1995	外郭北方の石組溝から「丁丑年」、「癸巳年」、「調」、「大費」などの木簡が出土	檀考研
2003	内郭北区画の大型掘立柱建物（南の正殿）を検出	檀考研
2005	内郭南の正殿のさらに北側から同規模の大型掘立柱建物（北の正殿）を検出	檀考研
2009	外郭北部において飛鳥宮最大規模の基幹水路跡及び飛鳥寺南の石敷遺構を検出	檀考研

- 飛鳥宮跡の発掘調査は、昭和29年（1954）の大和平野灌漑用導水路（いわゆる吉野川分水）の建設計画に端を発する。
- 昭和34年（1959）に奈良国立文化財研究所（現奈良文化財研究所）が予備調査を行い、昭和35年（1960）以降は檀原考古学研究所が発掘調査を担当。
- 檀原考古学研究所により、平成28年（2016）までに179次にわたる調査が行われている。

### 飛鳥宮跡の価値、飛鳥宮跡活用の基本方針(案)等について整理

#### 1) 飛鳥宮跡の価値について

- 飛鳥宮跡は、推古天皇(592年)以降、持統天皇が藤原宮に遷都(694年)するまでの間、飛鳥地方に営まれた宮の中で、特に7世紀の宮が集中する区域であり、当時の政治的中心であった
- そこは、東アジア諸国との交流を背景に、制度や儀礼等が整えられ、古代中央集権国家が形成されていった歴史を体現する中核的遺跡である
- 考古学的調査の結果、遺跡の変遷が明らかとなり、特に最も新しい時期(Ⅲ期)の宮は、建物の配置等が日本書紀の記述とも一致していることが確かめられている。
- 宮空間の構成や、「京」が形成される過程を明らかにする上でも重要な遺跡である
- その一方で、依然として調査されていない区域も多く、今後、新たな知見が得られることも期待される

#### 【参考】各種報告書等の記述

- 世界遺産暫定一覧表記載資産候補提案書 (H10 奈良県他)
  - 日本の古代政治の中核
  - 律令国家の形成から確立までの過程を解明できる古代都市空間
  - 東アジア・東南アジアの諸外国との交流や技術の受容が認められる遺物
  - 国家儀礼・官僚・身分・税などの制度の完成、貨幣の鑄造開始
  - 古事記・日本書紀の編纂(開始)
  - 飛鳥文化に育まれた宮殿や庭園などが、地下に良好な遺構として存在
- 「飛鳥宮跡保存活用構想」 (H26.3 明日香村)
  - 律令制による日本という統一国家が誕生した時期のシンボリック的遺跡
- 「明日香村歴史文化基本構想」 (H27.3 明日香村)
  - 日本国はじまりの地
  - 古代、飛鳥の地に営まれた宮都の繁栄を物語る遺跡群
  - それらを取り巻く各時代を通じた人々の活動が創り出してきた歴史文化

#### 飛鳥の宮からはじまったもの

- ① 「日本」「天皇」という呼称
- ② 時間の概念
- ③ 官位制度
- ④ 戸籍制度と住所表示
- ⑤ 税制度・大道／各地からの特産品
- ⑥ 貨幣のはじまり／無文銀銭、富本銭
- ⑦ 仏教興隆
- ⑧ 記紀／歴史書の編纂開始
- ⑨ 都市計画／苑池・京の設計

## 8 活用の基本方針等について②

### 2) 活用の基本方針（案）

#### (1) 活用に際しての基本的考え方

- 宮は歴史的に重要な空間であったことを踏まえ、飛鳥宮跡の価値を正しくわかりやすく伝え、高めるための方策を検討する
- 明日香村の景観との調和、地下の遺跡の保存に配慮する
- 「いかに活用するか」を考え、それにふさわしい整備を検討する

#### (2) 活用の目的

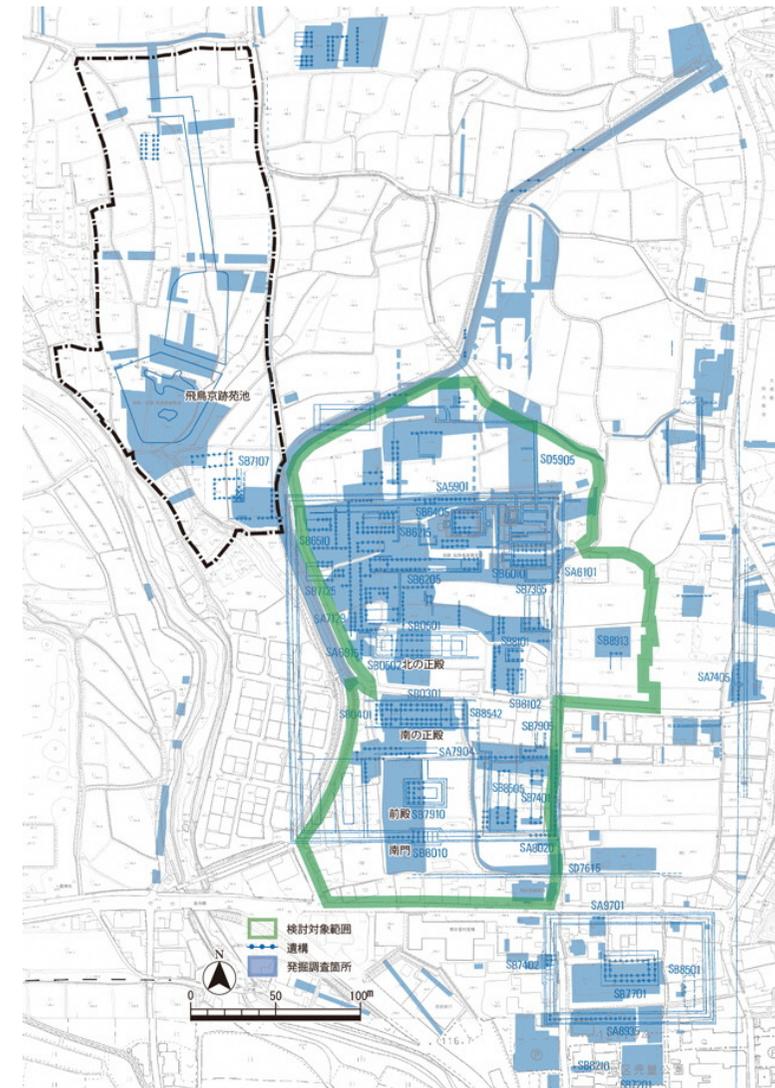
- 考古学や歴史学の研究成果と連動して、日本の古代史に親しみ、より深く知るための場を提供する
- 古代史の舞台として、国内外を問わず、多くの人々の交流を促進する
- 地域の誇りを高める取り組みを展開する

#### (3) 検討対象の範囲

- 史跡「飛鳥宮跡」の範囲を中心とする
- 隣接する飛鳥京跡苑池との一体的な利活用を検討する
- 今後の発掘調査や公有化の進捗に合わせて、周辺部への拡大も検討する
- 景観については、より広範囲に検討する
- いわゆるソフト事業の展開においては、より広範な時代、地域も考慮する

※ 史跡の範囲は、現在の目標を示すものであり、公有化の進捗や発掘の成果によって拡大または縮小することがある。

※ 遺構表示の年代設定は、発掘調査の進んでいる最上層の第Ⅲ期-B（飛鳥浄御原宮）を主な対象とする。なお、第Ⅲ期-B以外でも、「乙巳の変」などよく知られた史実等に基づく活用を検討する。

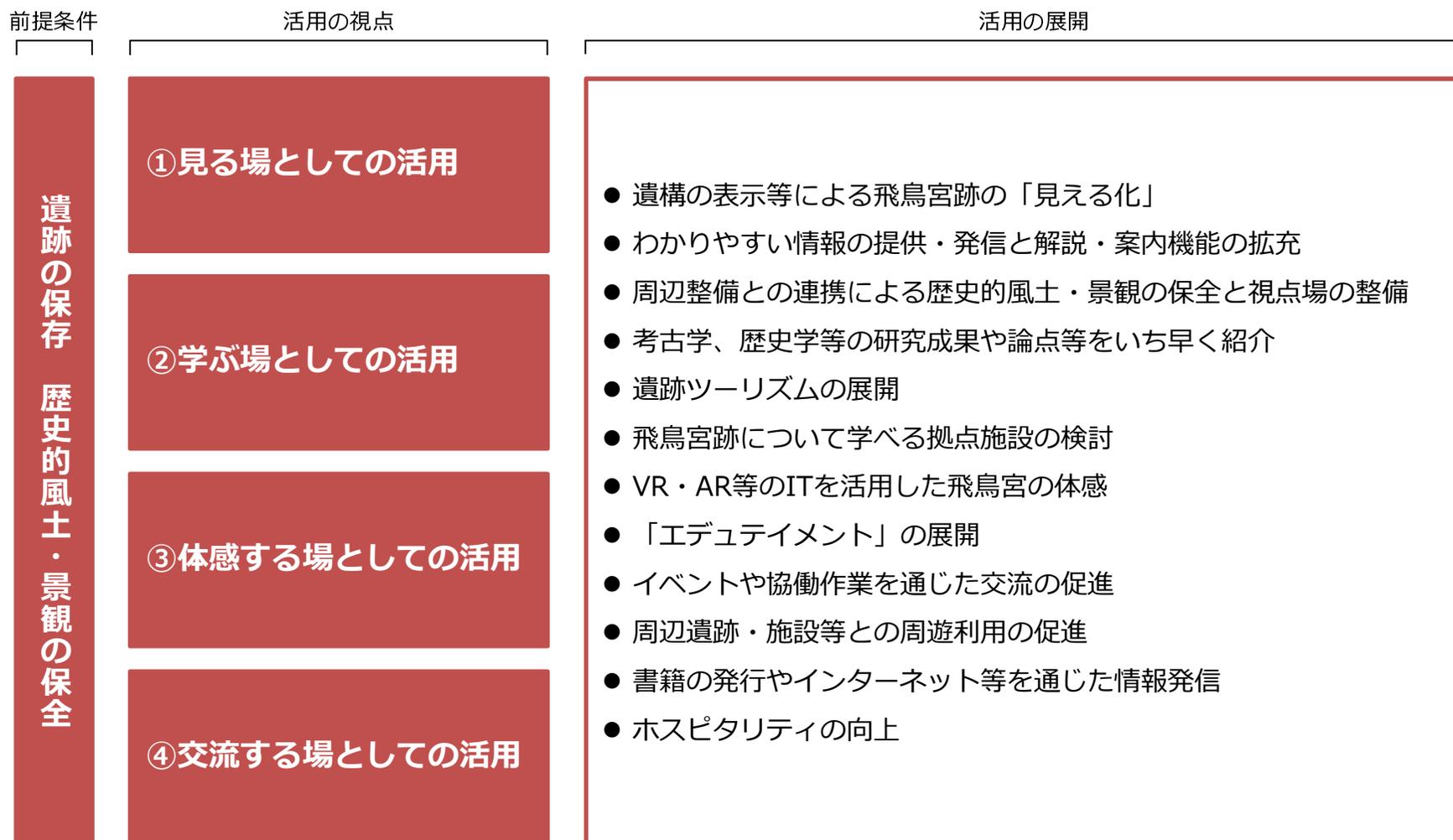


◆ 検討対象範囲：  
出典：飛鳥宮跡保存活用構想検討報告書（H26.3 明日香村）  
P.20に加筆

## 9 活用・整備のイメージ①

飛鳥宮跡の活用における四つの視点と、それに基づく活用の展開を以下のように設定

### 1) 活用の視点と展開イメージ



- 飛鳥宮跡への来訪者として、「子ども・若者」「国内旅行者」「外国人（韓国・中国等）」「外国人（その他）」が想定できる。今後メニューの詳細を検討する際には、それらのターゲットを念頭において内容の検討を行うものとする。

## 9 活用・整備のイメージ②

### 2) 活用のメニュー(案)とねらい

活用のメニュー (案)	見る	学ぶ	体感する	交流する
<b>●遺構の表示等による飛鳥宮跡の「見える化」</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>飛鳥宮跡の価値をわかりやすく伝え、往時をイメージし、体感できる装置として、様々な遺構表示の手法を検討</li> <li>対象地の公有化、発掘調査の進捗に合わせて、イベント等にも活用可能な「庭」(広場空間)を整備</li> </ul>	○	○	○	○
<b>●わかりやすい情報の提供・発信と解説・案内機能の拡充</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>「明日香の歴史展示」や「飛鳥女史紀行」のストーリーの具体化による、人物を中心に据えた歴史解説を展開</li> <li>宮の内外で、歴史の解説や案内、発掘や地下遺構の様子、万葉古歌や記紀の記述等を見ることができるよう解説・案内のための設備を設置</li> <li>デジタルサイネージ、スマートフォン等を活用した情報提供</li> </ul>	○	○		
<b>●周辺整備との連携による歴史的風土・景観の保全と視点場の整備</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>遠景を活かすとともに、近景との調和に配慮した修景</li> <li>飛鳥宮跡とその周辺部の双方向の景観に配慮した修景</li> <li>景観を解説するコンテンツの開発</li> </ul>	○	○	○	
<b>●考古学、歴史学等の研究成果や論点等をいち早く紹介</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>新たな知見を得るため、発掘調査等を積極的に実施</li> <li>研究の成果と飛鳥宮跡の活用とが密接に連動する体制づくり</li> <li>一つの史実だけでなく、異なる説や論点等も紹介し、「飛鳥時代」全体を学べる仕組みづくり</li> </ul>		○	○	○
<b>●遺跡ツーリズムの展開</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>発掘調査の現地説明会、見学会・体験会など、本物を見て、ふれる機会の提供</li> </ul>	○	○	○	
<b>●飛鳥宮跡について学べる拠点施設の検討</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>周辺の既存施設等の活用</li> <li>儀式、祭祀、習俗、衣装、食事などの考証</li> </ul>	○	○		○